# ヒフミ愛

# と金

春日信彦

# プロポーズ

４月１日（土）エイプリルフール。亜紀は、どんな嘘（うそ）をついてアンナをびっくりさせようかと昨日から考えていたが、なかなか腰を抜かすような嘘が思い浮かばなかった。何気に青空を流れるソフトクリームを連想させる白い雲に目をやり、ふと、眼下の垣根の向こうに目をやると、糸島（いとしま）小学校の体操服を着た小太りヒフミンが、両手を振って、早く気づいてくれよ、と言わんばっかりに何度もジャンプしていた。

まったく話がかみ合わないチョ～～おバカなヒフミンと遊ぶのも疲れると思ったが、今日は大嘘をついてからかってやろう、とヒフミンを歓迎していると言わんばかりの呵々大笑（かかたいしょう）で手を振った。亜紀の満面の笑顔を見たヒフミンは、今日はいつもより機嫌がいいと思ったのか、一目散に玄関にかけて行った。玄関のドアを思いっきり引き開けたヒフミンは、踵（かかと）と踵をこすり合わせて両足のスニーカーを脱ぐと右足のスニーカーを蹴り上げて、勢いよく廊下に跳び上がった。

「アキチャ～～ン、ピース大好き～～、ピースはどこ～～」と叫びながらヒフミンは階段をドタドタと駆け上がって行った。亜紀は、ガサツなヒフミンに腹を立てて、度々、怒鳴るように注意していたが、何度注意しても同じ繰り返しで、今では注意するのがアホらしくなっていた。明るい声でいつものように返事した。「ピース、ここに、いるわよ～～」亜紀の部屋に飛び込んだヒフミンは、ベッドで気持ちよさそうに昼寝していたピースを抱きかかえて、いつものようにチュ～～チュ～～とキスをした。

「ピース、大好き。早く結婚したいな～～」この言葉を聞くたびに本当にヒフミンはバカだと思った。ヒフミンは、結婚という意味がまったく分かっていないと思ったが、結婚の意味を説明するとなったら、亜紀もどのように説明していいかよくわからなかった。常識的な説明をしてもわからないと思ったが、この際、ガツンと言ってやることにした。「ヒフミン、ピースとは結婚できないの。ピースは、猫でしょ。バカなこと言わないでよ」

ヒフミンは、一瞬、マジな顔つきになって返事した。「できないって、どういうこと。僕は、ピースが大好きなんだ。必ず結婚する。もう、決めたんだ。今月、結婚する。ピースも、ボクの気持ち、わかってくれると思う。ネ～～、ピース」ヒフミンの返答を聞いて、正真正銘のバカだと確信した。「とにかく結婚は、できないの。結婚というのは、人間と人間がするもので、人間と猫がするものじゃないの。分かった？」

結婚を否定されたヒフミンは、目を吊り上げて反論し始めた。「アキちゃん、愛し合っていれば、人間と猫とでも結婚はできるんだ。アキちゃんこそ、分かってない。そういうのって、迷信（めいしん）じゃないか。大好き、ピース」亜紀は、マジバカなヒフミンとこれ以上口論してもらちが明かないと思ったが、負けず嫌いの亜紀は、このままヒフミンのたわごとに屈することに我慢できなかった。

「とにかく、できないの。結婚というのは、人間に使うのであって、動物には使わないの。ヒフミンが言いたいことは、ずっと一緒に、ピースと暮らしたいってことでしょ」ヒフミンは、ピースの目をじっと見つめ、大きくうなずき返事した。「分かってるじゃないか。でも、ピースは、アキちゃんちの猫だから、やっぱ、結婚は無理か。でもな～、どうにかして結婚する方法、ないかな～。アキちゃん、なにか名案ない？」

話がこんがらがってきたが、ピースをほしがっていることは間違いないと思えた。「そんなに、ピースがほしいの？一緒に暮らしたいの？でも、どんなにヒフミンがピースのことが好きでも、ピースがヒフミンのことが好きかどうか、わからないじゃない。ピースの気持ちを確かめてからよ。ピースの気持ちがわかればいいけど、ピースは日本語が話せないし、ピースの気持ち、聞きたくても聞けないし」

ヒフミンは、大きく目を見開き、大きな声で返事した。「きっと、ボクのこと、好きに決まってる。目を見ればわかるんだ。命がけで、一生ピースを大事にする。だから、ピースと結婚させてくれ、頼む、この通り」ヒフミンは、ピースをベッドにそっと置くと、両手を合わせて亜紀にお願いした。もう一度、人間と猫は結婚できないと言おうかと思ったが、ヒフミンのピースへの思いが胸の奥までズシンと突き刺さり、ヒフミンの思いをかなえてあげたくなってきた。

亜紀は、ベッドでキョトンと首をかしげているピースをじっと見つめ、しばらく考え込んだ。ピースは、この家に住んで3年くらいになる。無理やり、ヒフミンの家で飼っても、元の家が恋しくなって、この家に帰ってくるに違いないと思えた。でも、ピースがヒフミンの家に行っても、そこで気持ちよく暮らせるのなら、ヒフミンにあげてもいいと思った。試しに、一度、ヒフミンの家に連れて行って、ホームステイさせてみるのも一つの方法ではないかと閃（ひらめ）いた。

「そうね～、問題は、ピースの気持ちよ。本当にヒフミンのことが好きで、ヒフミンの家で気持ちよく暮らせるのなら、ピースをあげてもいいけど、試しに、ホームステイさせてみようかな～～」ヒフミンは、突然笑顔を作り、右手に握り拳（こぶし）を作った。「よっしゃ、ピースの気持ちだな。早速、ピースをぼくんちに連れて行ってみよう。いいだろ」亜紀は、うなずいたが、目を吊り上げたアンナの顔が頭に浮かんだ。「でも、ちょっと待って、ママに聞いてみるから。ママがいいって言ったら、オーケーよ」

亜紀は、そう言い終えるとすっと立ち上がりドアに向かって歩き出した。ドアを開けた亜紀を見たピースは、ヒョイと飛び起きて、ベッドを飛び降り、亜紀を追って駆けだした。ピースが自分から逃げていくように思えたヒフミンは、ドアのところでピースを素早くつかみ取り、グイッと抱きしめた。そして、目を閉じて神に祈りをあげた。「どうか、ピースと結婚できますように。神様、お願いします。結婚できたら、一生ピースを大事にします。どうか、お願いします」

亜紀がお店に駆けこんだ時、アンナは暖簾（のれん）を取り込んでいた。天気が良かったせいか、開店から老人たちの団体客がやってきて、ぜんざいが完売していた。まだ、２時を少し過ぎたころだったが、ぜんざい目当てのお客にぜんざいは売り切れました、と注文を断るのも悪いと思ったアンナは、さやかと相談した結果、店じまいをすることにした。「ママ、もう、店じまい？」アンナは、ご機嫌の声で返事した。「今日は、商売繁盛よ。もう、ぜんざい、売り切れたの、ラッキー」

さやかの援護を期待した亜紀は、さやかの顔を見つめてお世辞を言った。「さやかお姉ちゃんが、手伝ってくれたからじゃない。かわいいウェイトレス目当てに、お客がわんさかやってきたのよ」さやかは、お世辞を言ってくれた亜紀に笑顔を向けたが、なにか魂胆（こんたん）があるとピンときた。「そういってくれると、うれしいわ。アキちゃん、何か、ママにお願いでもあるのかな？顔にそう書いてあるぞ」亜紀は、心を見透かされて、顔を真っ赤にした。「やっぱ、お姉ちゃんは、名探偵。そうなの。ママ、お願いがあるんだけど。聞いてくれる？」

亜紀のお願いは、いつも非常識なことが多いと分かっていたアンナは、口をひん曲げて返事した。「まあ、聞くだけね」さやかも亜紀のお願いは、突拍子（とっぴょうし）もないことが多いと分かっていたため、キッチンでじっくり聞こうとアンナに声をかけた。「アンナ、もう片付いたわ。キッチンで、亜紀ちゃんのお願い、聞いてあげましょうよ。アキちゃんのお願いって、何だろう。ワクワクするわ」笑顔になった亜紀は、「ママ、ママ、早く」と声をかけながら、アンナの後ろに回り込むと大きなお尻を押し始めた。いやな予感を感じたアンナは、ピンクのエプロンを外しながらゆっくり歩き始めた。

キッチンにさやかが顔をのぞかせるとヒフミンがピースを抱っこして突っ立っていた。「あら、ヒフミン、ピースを抱きしめて、ラブラブじゃない」ヒフミンは、ラブラブと言われて、天にも昇る気持ちになった。そして、すでに亜紀がお願いを話したと思い、返事をすると即座に頭を下げた。「さやかさん、ラブラブに見えますか。ピースが大好きなんです。よろしくお願いします」さやかは、お願いします、と聞いて、亜紀のお願いは、ヒフミンのことだとピンときた。

しばらくして、「よいしょ、よいしょ」という亜紀の声が廊下から響いてくると、しかめっ面のアンナが、亜紀にお尻を押されながらしぶしぶキッチンに入ってきた。アンナの姿を見たヒフミンは、直立不動で深々と頭を下げた。「お母様、お願いします。かならず、幸せにします。ぜひ、お願いします」アンナは、何のことやらさっぱりわからなかった。「ヒフミン、まだ、ママには話してないの。これからお願いするから、ヒフミンも一緒にお願いして」

アンナは、お願いがヒフミンのことだと分かり、一層、顔をぐにゃっとしかめた。亜紀の顔をじっと見つめたアンナは、内心耳栓をしたい気持ちになったが、まな板の鯉（こい）の心境になりお茶を入れることにした。さやかは、お願いがヒフミンのことだと分かり、二人に声をかけた。「亜紀もヒフミンもお腰かけなさい。アンナに、よ～～く、わかるように話すのよ」

アンナは、ブルーとホワイトのチェック柄のトレイをテーブルに置き、さやかには紅茶を、亜紀とヒフミンには、オレンジジュースを差し出した。アンナが、さやかの左横にゆっくり腰かけると二人に声をかけた。「ジュースでも飲んで、気を落ち着かせて、大人にも、よ～～く、分かるように、話してちょうだい。お願いとやらを」アンナは、ティーカップを手に取り、二人を睨（にら）み付けるような眼差（まなざ）しで紅茶をすすった。

亜紀は、どのようにお願いしていいか、頭の中が整理できていなかったが、ヒフミンの気持ちを素直に伝えることにした。「ママ、ヒフミンは、ピースのことが大好きなの。ママも知ってるよね。それで、ヒフミンが、ピースと結婚したいっていうの」アンナは、結婚と聞いて口に含んでいた紅茶を吹き出してしまった。紅茶を吹きかけられた目の前に座っていた亜紀は、キャ～～と叫んで、跳びあがった。「ママったら」亜紀は、アンナを睨み付けて怒鳴った。

「アキ、ゴメン」と謝るとアンナは即座に立ち上がり、バスルーム横の洗面所にかけて行った。フェイスタオルを手にしたアンナは、戻ってくると顔にかかった紅茶を丁寧にふき取った。ア～～、と大きなため息をついたが、ニコッと笑顔を作り、亜紀に返事した。「ごめんね、アキ。でも、結婚とかいうからよ。そりゃ～、吹き出すわよ。それで、話の続きだけど」アンナは、腰を下ろすと、ニコッと笑顔を作り、二人の顔を交互に見つめた。

亜紀は大きくゆっくり深呼吸をして続きを話し始めた。「ヒフミンは、ピースが大好きなの。だから、ピースと結婚したいんだって。何度も、人間と猫は、結婚できないといったんだけど、ヒフミンは、できると言い張るのよ。そこで、お願いなんだけど。ピースの気持ちを知るために、ヒフミンの家にホームステイさせたいの。もし、ピースがヒフミンの家で気持ちよく暮らせるようなら、ピースをヒフミンにあげようかと思うんだけど。ママは、賛成してくれる？」

アンナは、ピースを特に好きではなかったが、いざ、手放すとなると即座に返事ができなかった。腕組みをしたアンナは、しばらく考え込んだ。アンナは、猫が好きな方ではなかったので手放してもいいとは思ったが、もし、いなくなればなんとなく寂しくなるような気もした。スパイダーが悲しまないだろうか？拓実が泣き出さないだろうか？ピースは、突然迷い込んできた居候（いそうろう）だったが、家族の一人でもあるようで、気持ちがスッキリしなかった。

さやかが、アンナの気持ちを察して口をはさんだ。「アキちゃんは、本当にピースを手放してもいいの？寂しくないの？」亜紀は、本当は手放したくなかった。でも、ピースがヒフミンのことが好きで、ヒフミンと一緒に暮らすことを望むのなら、ピースのために手放してもいいと思った。亜紀の気持ちは中途半端だったが、ピースの幸せを考え自分の気持ちを伝えた。「確かに、ピースがいなくなるのは、とっても寂しい。でも、ピースが幸せになるのであれば、ヒフミンに面倒を見てもらってもいいと思う。あくまでも、ピースの気持ち次第よ」

ヒフミンは、ここぞと自分の意見を述べた。「ボクは、ピースを幸せにします。命がけでピースを幸せにします。ピースと一緒に暮らしたいのです。お願いします。今すぐ、結婚させてください。お母様、お願いします」ヒフミンは、ピースの目をじっと見つめ笑顔を作った。アンナは、ヒフミンの気持ちに圧倒され始めていた。亜紀がヒフミンの気持ちに押し切られたのも無理はないと思えた。さやかもヒフミンの熱意に圧倒されていた。

アンナは、この場でヒフミンの気持ちを踏みにじることができない心境になってしまった。この際、ピースの気持ちを知るために、ホームステイを許可することにした。「ヒフミンがそこまで言うんなら、ホームステイをやってみるといいわ。でも、ピースが嫌がったら、この結婚話は、なかったということでいい？」ヒフミンは、自信ありげに、大きくうなずき、返事した。「分かりました。ピースの気持ち次第ということですね。ピースが、嫌がれば、ボクも男らしく諦（あきら）めます」

アンナは、ヒフミンに、ほんの少し常識がある事にホッとした。「アキ、ピースの気持ち次第ということでいいわね。ピースを手放すことになっても、文句言っちゃだめよ。みんなで、決めたことなんだから、いい」亜紀は、一瞬、しかめっ面をした。脳裏に手放す時の情景が浮かぶと、寂しさかドッとこみあげてきた。心の底では、ピースが嫌がってヒフミンの家から逃げ出してほしいと願った。

ヒフミンが、どうして、今ごろになって、急にピースと結婚したいと言い始めたのか、さやかには腑（ふ）に落ちなかった。さやかは、正面に腰かけているヒフミンをじっと見つめ、しばらく考えを巡らせた。さやかは、なにか隠された事情があるような気がして、ピースを抱きしめ幸福そうなヒフミンに声をかけた。「ヒフミン、ピースが好きなのは、ずっと前からでしょ。どうして、今ごろになって、突然、結婚したいなんて言い出したの？」

ヒフミンは、一瞬、ニヤッとして、うつむいた。ピースをじっと見つめ、話すのをためらっているようだったが、顔を持ち上げニコッと笑顔を作って話し始めた。「四月から、お姉ちゃん、軍事工場で働くために、出稼ぎに行ったんだ。急に、お姉ちゃんがいなくなって、ボク、寂しくなって、ピースがそばにいてくれたらな～～、って。お母ちゃんは、病気で寝たきりだし、かわいいピースがやってきたら、お母ちゃんも、喜ぶんじゃないかと。

それと、おじいちゃんが、日本が二度と戦争しないように、って家の横の畑にオリーブの木を１２３本植えたんだ。オリーブの花言葉は、“平和”で、英語で、“ピース”っていうんだって。そのことを聞いて、ひらめいたんだ。ピースと結婚すれば、きっと、日本は平和になる。神様も、そう言ってるような気がして・・」話し終えたヒフミンは、ガクンとうなだれてしまった。

アンナは、寂しそうな顔でうなだれたヒフミンを見て、ピースをあげてもいいと思い始めた。ヒフミンの姉が中学を卒業して、軍事工場で働くことは、亜紀から知らされていたが、一人ぼっちになったことを知らされ、一層、ヒフミンが不憫（ふびん）に思えてしまった。「そうだったの、それは、寂しいわね。とにかく、ピースの気持ち次第ね。ピースに気にいられたら、結婚したらいいわ」突然現金になったヒフミンは、結婚が決まった如く、喜色満面（きしょくまんめん）の笑顔を作った。「はい、ありがとうございます。ピースを一生守ります。必ず、幸せにします」

別れるのは寂しいと思ったが、ヒフミンとピースが幸せになるのであれば、我慢しなくてはと亜紀は決心した。「そうだ、いつからホームステイする？準備もあるし、明日からだったら・・」眠ったふりをして、話を聞いていたピースは、なんとなく不安になっていた。ピースもヒフミンと暮らすことは嫌いではなかったが、アキちゃん、タクミ、アンナ、スパイダーと別れるのは、やはり寂しかった。人間の言葉が話せるのなら、この場で自分の気持ちを伝えたかったが、それができない限り、ホームステイをやった結果、自分の気持ちを表す以外ないと腹をくくった。

金持ち特区

亜紀の気持ちは、スッキリしなかった。やはり、ピースと別れることを思うと、急激な寂しさが襲ってきた。なんといっても、理解し合える一番の話し相手はピースだった。中卒のアンナとは、意見が合わず、拓実とは、会話にならず、スパイダーは男子の考えばかり主張して、女子の気持ちを理解できない。さやかは、志摩総合病院に行ったまま、たまにしか帰ってこず、帰ってきたと思えばとんぼ返りですぐに病院に戻って行く。

ピースがいなくなった生活を思うだけで、今にも泣き叫びたいほどの悲しみが込み上げてきた。いまさら、ヒフミンにピースをあきらめてほしいとは言えず、とにかくピースがヒフミンを嫌って戻ってくることを神様にお願いした。寂しそうな表情の亜紀が気になったのか、ヒフミンが亜紀に声をかけた。「アキちゃん、心配ご無用。きっと、ピースを幸せにするから。エサもきちんとやるし、散歩にも連れて行く。神様に誓って、約束する」ヒフミンは、今はうれしさいっぱいで、亜紀の寂しさを分かるはずもなかった。

亜紀は、悲しそうな顔で、小さくうなずいた。「ヒフミン、お願いね。ピースは、大人だから、手はかからないと思うけど、時々、カゼを引くから、健康には十分気を付けてね。元気が無いときは、病院に連れて行ってあげてね」ガッツポーズをしたヒフミンは、ドヤ顔で威勢良く返事した。「まかせんしゃい。しっかり、抱きしめて、カゼなんかひかせんバイ」ヒフミンは、ピースを見つめグイッと抱きしめた。きつく抱きしめすぎたのか、ピースは、体をくねらせヒフミンの懐から飛び出してしまった。

ヒフミンは、「ピース、ピース」と叫びながら、あとを追いかけたが、ピースは、捕まったら拷問にかけられると言わんばかりに、逃げるようにリビングを駆け抜け、ベランダに脱出した。亜紀は、ヒフミンの荒っぽいしぐさが気になっていた。ヒフミンは、興奮すると、力を入れすぎることがある。「ヒフミン、何度も言ってるじゃない、もっとやさしく、抱きしめないと。ピースに嫌われるわよ。ほら、逃げ出したじゃない」

目じりを下げたショボい表情になったヒフミンは、反省の色を見せたかに見えたが、椅子に腰かけるや否や話を亜紀にふった。「分かったよ。優しくすりゃいいんだろ。そういうアキちゃんは、誰と結婚したいんだ。ヒデキか？」秀樹と聞いて、亜紀は固まってしまった。女子は、結婚のことを時々、ガールズトークでするが、それは大人になっての結婚のことで、現実的なことではなかった。

「何、言いてるの。結婚っていうのは、大人の話でしょ。小学生が、言うことじゃないの。何度も言うけど、ヒフミンは、ピースと結婚できないのよ。ホームステイは、ピースの面倒をヒフミンが見るってこと。ただ、それだけ。分かった。バ～～～カ」亜紀は、目を吊り上げてヒフミンを睨み付けた。「ハハハ・・」ヒフミンは、大声で笑った。「分かってるって、アキちゃんは、頭はいいけど、がんこだな～～。人間と猫も結婚できるって。オリーブ園で、結婚式を挙げて、披露宴もするつもりなんだ。みんなで楽しく、やろうよ。結婚式、待ち遠しいな～～」

さすがに、アンナとさやかもあきれ返ってしまった。さやかも、ヒフミンは非常識だと思っていたが、ここまで能天気でおバカだとは思わなかった。「ヒフミン、気持ちはわかるけど、結婚というのは、お互いの気持ちが必要でしょ。あまり、先走らない方がいいと思うわよ。ピースの返事は、まだでしょ」ヒフミンは、ピースに嫌われたときのことを思い描いたのか、目じりを下げて、コクンと頭を落とした。

さやかは、ちょっと言い過ぎたと思い、話を替えることにした。「そう、志摩総合病院を中心に、“金持ち特区”ができるそうよ。アンナたちも、金持ち特区に入れるんじゃない」アンナは、初めて聞く、“金持ち特区”に関心を示した。「さやか、その、金持ち特区、って何よ。金持ちが集まるってこと。全国から？」

さやかは、この極秘情報を話すことにした。「まだニュースで報道されてないんだけど、関東が、原発事故による放射能で住めなくなったじゃない。だから、関東の金持ちが、続々と福岡にやって来てるのよ。そこで、全国的に人気のある風光明媚な糸島に目をつけた政府が、志摩に、特別に金持ちのための住宅街を作る計画を立てたのよ。でも、そこに住むには条件があって、年収２０００万円以上の人、もしくは、総資産５０００万円以上保有している世帯じゃないと入れないらしいの。アンナは、死亡保険金の貯金が１億円以上あるから、入れるんじゃない」アンナは、インテリばかりが集まるようなところに入る気は毛頭なく、素知らぬ顔をしていた。

　ところが、突然、ヒフミンが目を丸くして叫んだ。「本当ですか？志摩にですか？ぼくんちなんか、貧乏でお母ちゃんの薬代もろくに払えないっていうのに。お姉ちゃんは、仕送りするために、出稼ぎに行ったっていうのに。それはないよ。そんなに金持ちがたくさんいるんだったら、貧乏人に、少しでもいいから、お金ばらまいてくれよ。うらやましいな～。アキちゃんちも、大金持ちなのか。いいよな～、金持ちの子供って。金持ちの家に、生まれたかったな～。そうだ、ヒデキんちも金持ちだし、きっと、ヒデキは、金持ち特区にやってくるに違いない。そして、アキちゃんと結婚するに決まってる。チクショー、ヒデキのやつ」

　さやかの話を真に受けたヒフミンは、マジに妄想の世界に入り、発狂してしまった。アンナは、アメリカにはそのような金持ちの街があると最近見たニュースで言っていたのを思い出した。だから、本当に金持ち特区ができるのではないかと思えた。「そんな金持ち特区に入る気はないけど、関東の金持ちが、続々と九州に移住していると噂で聞いたわ。それって、もう国会で決まったことなの？天皇、皇后だって、放射能で死にたくないだろうし、皇居も福岡に移るのかしら？」

　さやかは、さらに、マジな顔つきで話を続けた。「もはや、政府とは無関係の数人の超国際金融資本家が、日本の政治をコントロールしてるの。金持ちも、大企業の本社も、皇居も、福岡に移るらしいわよ。いずれ、首都が東京から福岡に移るのも、時間の問題らしいわ。さらに、彼らが、水面下で九州の土地を買収してるんだって。九州は、日本であっても、いずれ彼らの領土になるのよ。まさに、２１世紀の怪奇ね」アンナ、亜紀、ヒフミンは、目を点にして、じっとさやかの話に耳を傾けていた。

目をパチクリさせ我に返った亜紀は、オドロオドロしい怪談話をするように小さな声で話し始めた。「まさに、２１世紀のホラードラマって感じね。ＡＩイケメンティーチャーが、冗談のように言ってた。超国際金融資本家は、ＡＩを使って、人間の知能では到底太刀打ちできないマネーゲームを仕掛けてるんだって。いずれＡＩ戦争が起きて、地球は放射能で覆われ、人類は滅亡するって」さやかもアンナもヒフミンも亜紀も、お互いの目を見つめ合って、小刻みに震えだした。

ヒフミンは、ＡＩと聞いて、ライバルの秀樹を思い出した。「あのヤロー、きっと、ＡＩを使って、人類を滅ぼすに違いない。アキちゃん、ヒデキなんかと、結婚しちゃだめだ。陰険で、人をバカにするようなあんなヤローとは、付き合っちゃだめだ」またまた、いい加減なことをいう小ブタヤローと思った亜紀は、立ち上がってヒフミンを睨み付けた。「ヒフミン、たいがいにしてよ。ヒデキとは何の関係もないんだから、付き合ってもいないし、結婚もしないし、もう、そんな話やめて」亜紀は、右手のこぶしで殴りかかろうとした。

アンナは、夜叉（やしゃ）の形相（ぎょうそう）になって右腕を振り上げた亜紀を見て、とっさに、亜紀の右腕をつかんだ。「アキ、よしなさい。ヒフミンも女子の気持ちを考えなさい。まったく、おバカなんだから」ヒフミンは、殴られるかと思い、椅子から飛び跳ねていた。マジに怒った亜紀を見たのは初めてらしく、顔が引きつっていた。「ゴメン、二度と言わない。ゴメン」

さやかもヒフミンの傍若無人（ぼうじゃくぶじん）に怒りが爆発した。目を吊り上げたさやかは、即座に立ち上がり、ヒフミンの横に立つと左手でグイッと頭を押さえつけて頭を下げさせた。「心から、ちゃんと、謝りなさい、ヒフミン。もう、アキのことを、二度と言っちゃダメ、分かった」ふくれっ面のさやかの怒りは、おさまらず、グイグイっと押さえつけた後、右手の拳骨でゴツンと一発食らわせた。

スパイダーの怒り

ヒフミンの家は、亜紀の家から500メートルほど南方向にある広い庭を構えた旧家で、母屋の東側に1ヘクタールほどのオリーブ畑がある。亜紀は、歩いてヒフミンの家まで遊びに行ったことが何度かあり、時々、ピースに会いに行くことはさほど大変なことではない。そのこともあって、少しは気が楽であった。家族で話し合った結果、ピースは、翌日の日曜日の午後に引っ越しすることになった。そのことは、スパイダーにも話しておくべきだったが、引っ越した後でも事情を話せばわかってくれると安易に考え、話していなかった。

アンナは、午後1時半ごろ、キャットフード、キャットハウス、トイレ、マット、などピースの家財をベンツでヒフミンの家まで運びこんだ。そして、ヒフミンと亜紀は、運び込まれた家財をピースのために用意された6畳の洋間に運びこんだ。その部屋は、納戸として使っていた部屋で、窓は小さく西向きだったので、ピースが気にいるか不安であったが、部屋の広さは一匹の猫にとっては十分な広さだった。とりあえず、しばらくはその部屋で暮らしてもらうことにした。

亜紀は、ピースを安心させるためにホームステイのことをじっくり話して自宅に帰ることにした。ピースは、昨日の会話からヒフミンの家に連れて来られることを知っていたが、亜紀の気持ちをもう一度はっきりと知りたかった。冠木門の入口側の階段に腰かけた亜紀は、ピースを膝の上に載せ、目を見つめて話し始めた。「ピース、よ～～く、聞いてね。今日から、しばらく、ヒフミンと一緒に暮らすの。決して、亜紀やアンナが、ピースを嫌いになったからじゃないの。

ヒフミンが、ピースのことが大好きで、ピースと一緒に暮らしたいっていうから、しばらく、一緒に住んであげてほしいの。もし、ヒフミンと暮らすのが嫌になったら、いつでも帰ってきていいのよ。亜紀の家とヒフミンの家は、500メートルぐらいだから、そんなに遠くないし、亜紀も、スパイダーも、時々、ピースに会いに来るし。ヒフミンは、少し、ガサツだけど、気持ちはとっても優しいから。分かるでしょ。

あ、それと、ヒフミのお姉ちゃんは、出稼ぎに行って、ヒフミはとっても寂しいんだって。ピースが慰めてあげれば、ヒフミはとっても喜ぶと思う。勝手なことばかり言って、ピースは怒るかもしれないけれど、ヒフミを慰めてあげて。亜紀もアンナも、ピースのことがとっても大好き。だから、おうちが恋しくなったら、いつでも、帰ってきていいのよ。分かってね、ピース。それじゃ」

亜紀は、別れを告げると、聡明なピースは、小さくうなずいた。亜紀は、ヒフミにピースを手渡すと「それじゃ、よろしく」と言って踝（くびす）を返した。歩きながら帰る亜紀の後姿を悲しそうな瞳で見つめていたが、ピースは亜紀のあとを追うことはなかった。大学教授に優しく育てられたピースは、亜紀とヒフミの気持ちを十分くみ取っていた。「アキちゃん、ありがとう。きっと、幸せにするから」ヒフミは、ピースをギュッと抱きしめ、つぶやいた。

いつもなら、500メートルぐらいの距離は短く感じていた。元気良く、駆け足で帰っていた距離が、なぜか、この日に限って、走ろうと思っても、脚が動こうとしなかった。また、家までの距離が不思議なくらい長く感じた。亜紀は、悪いことをしたとは思わなかったが、やはり、何か後ろめたさが付きまとっていた。ピースの気持ちを踏みにじったのではないかという疑念が、頭の片隅にあって、気持ちがスッキリしなかった。

南北に走る平原歴史公園通りの南側から肩を落としてトボトボと歩いて帰ってくる亜紀の姿が、垣根の横で日向ぼっこしていたスパイダーの目に飛び込んできた。誰かにイジメられたと思ったスパイダーは、全速力で駆けて迎えに行った。いつもならば、亜紀は、跳びついてくるスパイダーを抱きかかえ、頭をナデナデして笑顔を見せていたが、今日ばかりは、スパイダーのお迎えも空振りだった。

これは一大事と思ったスパイダーは、即座に声をかけた。「アキちゃん、誰だ、イジメたやつは。懲らしめてやる」魂が抜け落ちてしまったような表情の亜紀は、スパイダーの頭にそっと手を置いた。まったく、こんなに無反応の亜紀を見たのは、初めてであった。「どうしたんだ。怖くて、言えないのか？勇気を出せ。反撃しなかったら、また、イジメられるぞ。闘うんだ」スパイダーの叫び声も“馬の耳に念仏”のごとく、亜紀は、ぼんやりとスパイダーを見つめていた。

誰かがポンポンと小さく肩を叩くような気がした亜紀は、ふと我に返り小さな笑顔を作って答えた。「あら、スパイダー、元気？今、ヒフミンの家からの帰りなの。ピース置いてきちゃった。あ、そうだ。スパイダーには、話してなかったのよね」スパイダーは、何のことやらさっぱりわからず、首をかしげた。「ピースを置いてきたって、どういうこと？」亜紀は、ちょっと気まずくなって、公園で話すことにした。「ちょっと、話しづらいのよね。公園で話すから」亜紀は、自宅前を通り過ぎて自宅の北側にある桜の木で囲まれた公園に向かった。

スパイダーは、いったいどういうことだろう、と首をかしげながら亜紀のあとをついて行った。昨夜から、ピースの様子がどことなく変であったことを思い出した。いつもなら、夕食後、冗談を言ったり、テレビを見たり、亜紀の膝で居眠りしたり、気まぐれなことをしていたが、昨夜に限って寂しそうな顔をして部屋にこもっていた。もしかして、ピースが変な病気にでもかかって、それで、隔離するためにヒフミンの家に追いやられたんじゃないか、とよからぬ憶測をしてしまった。

肩を落としてゆっくりとベンチに腰かけた亜紀は、あ～～、と大きなため息をついた。スパイダーは、亜紀の正面にお座りすると、励ますように声をかけた。「アキちゃん、元気出しなよ。いったい、どうしたというんだ？ピースが伝染病にでもかかったのか？そりゃ～、気取ったネコだって、病気はするさ。オレと違って、ピースは、オバンだし。しょうがないさ。そんなに、暗い顔をせずに、さあ、笑顔を作って」

亜紀は、どのように話そうかと話の流れを頭の中でまとめていた。大きく深呼吸すると、勇気を振り絞って話すことにした。「あのね、悪気はないのよ。怒らないでね。本当に、悪気はないんだから。あのね、ピースは、当分、ヒフミンの家で暮らすことになったの。あくまでも、ホームステイだから、ピースが返ってきたい時に、いつでも、帰ってこられるの。だから、無理やり、ヒフミンの家に預けたんじゃないの。そのことは、分かってね。あくまでも、試しに、預けただけだから。スパイダーに黙っていたことは、謝るわ。ちゃんと、スパイダーにも話すべきだったけど、アキったら、バカね。本当に、ごめんなさい」

寝耳（ねみみ）に水、とはこのことだった。スパイダーは、心の底から怒りが込み上げてきた。「アキちゃん、そんな、大切なことは、前もって言ってくれよ。ボクだって、家族の一員じゃないか。ボクは、イヌだけど、ピースとはうまくやっていたんだ。ピースは、納得して行ったのかよ。本当に、無理やりじゃないだろうな。強引に連れて行ったのなら、アキちゃんと言えども、許さないからな」スパイダーは、ウ～～～、とうなり声をあげた。

牙をむき出したスパイダーを見た亜紀はのけぞった。「本当にごめんなさい。ピースは、ちゃんとわかってくれたの。あのね、ヒフミンのお姉ちゃんが、今月から出稼ぎに行ったの。それで、ヒフミンは、一人ぼっちになって、悲しんでいたのよ。それで、ヒフミンを慰めてあげて、ってお願いしたの。そしたら、ピースは、承諾してくれたのよ。だから、無理やりじゃないの。ピースには、いつでも、おうちに帰ってきていいって、話しておいたから。心配しないで、スパイダー」

ほんの少し気持ちが落ち着いたのか、コクンコクンと頭を上下させた。無理やりでなければ、ピースの気持ちに任せればいいと思った。ヒフミンの家も、すぐそこだし、かけて行けばすぐに会えると思った。「そういうことだったら、いいけど。ピースは、大人だから、母性本能とやらで、ヒフミンを慰めようと承知したんだろう。まあ、いいや。いつでも、会えるし、あの子ブタは、おバカだけど、優しいところはあるから。明日、散歩がてらに、ピースの様子を見に行くとするか」

　スパイダーは、シッポを左右に振って、ニコッと笑顔を作った。スパイダーの機嫌がよくなったと知り、亜紀は胸をなでおろした。やっぱ、ピースには無理なお願いをしたようで、ちょっと心配になったが、ピースはスパイダーと違ってしっかりしているから、ヒフミンとうまくやって行けるように思えた。「分かってくれて、よかった。本当に、ごめんね。ピースがいなくなって、寂しくなるけど、遠くに行ったわけじゃないし、いつでも会えるし、これでよかったのよね。スパイダーもそう思うよね」スパイダーも笑顔を作って、ワンと吠えた。

　スパイダーの機嫌がよくなってホッとした亜紀は、スパイダーが好きな“ネコ、よんじゃった”をスキップしながら歌い始めた。ネコ、よんじゃった　ネコ、よんじゃった　ネコ、よんでもないのに　よってきた　ネコ、ついてくる　ネコ、ついてくる　ネコ、こなくていいのについてくる　ノドならしてあまえては　エサをねだるおちょうしもの　ゴロニャ～ン、あしもとすりよって　ゴロニャ～ン、あいきょうふりまいて　でもネコジタで　でもネコジタで　ネコ、あついものはたべられない　ネコ、へこんでる　ネコ、へこんでる　ネコ、おなかすかしてへこんでる・・・亜紀の歌声を聞いたスパイダーは、メトロノームのようにシッポを左右にふりながら、リズミカルにステップを踏み始めた。

高嶺（たかね）の花

　ヒフミンは、ピースがやってきて、急激に元気が出た。早速、腎臓（じんぞう）病で寝込んでいる母親に紹介することにした。ピースを抱きかかえたヒフミンは、母親の寝室のドアをそっと引いた。狸（たぬき）寝入りをしていた母親は、ベッドでかすかな寝息を立てていた。そっと忍び込んだヒフミンは、小さな声で声をかけた。「お母ちゃん、お母ちゃん、大丈夫？」母親は、ゆっくり瞼（まぶた）を開いた。「なんだい？」顔を傾けた母親は、ヒフミンが抱っこしている猫に目をやった。

　ヒフミンは、母親にピースの顔を見せようとピースを少し持ち上げ、母親の顔の前に持って行った。「ほら、かわいいだろう。ピースっていうんだ。今日から、家族の一員だよ」母親は、ニコッと笑顔を作ったが、怪訝（けげん）そうな表情を作り、尋ねた。「いったい、そんな立派な猫、誰から預かったんだい？この猫は、血統書付きの猫じゃないのかい？こんな、立派な猫預かって、大丈夫かい？ちゃんと、面倒、見れるのかい？」

　ヒフミンは、ピースをそっと母親の枕元に置いて、ドヤ顔で答えた。「そうさ、この猫は、日本一賢くて、美しい猫さ。亜紀ちゃんちから、もらったんだ。でも、ピースがこの家を気にいればの話だけどね。しばらく、うちにホームステイさせて、様子を見るんだ。ピースが、気にいってくれるといいんだけど。ボク、頑張って、一生懸命、ピースの面倒見る。だから、お母ちゃん、ピース、飼うの、賛成してくれるよね」

　母親は、ニコッと笑顔を作り、返事した。「そうかい。アキちゃんちからもらったのかい。でも、よくも、こんな立派な猫をくれたね。ヒフミンに、面倒見切れるかね～。なんといって、もらったんだい。無理やり、もらったんじゃなかろうね」ヒフミンは、ちょっと眉間（みけん）に皺（しわ）を寄せたが、素直に事情を話した。「違うよ。ちゃんとお願いしたんだ。ボクは、ピースが大好きで、ピースを命がけで一生面倒見るって。必ず、幸せにするって。それに、お姉ちゃんがいなくなって、寂しいってことも言ったけど」

母親は、黙って聞いていたが、小さな笑顔で答えた。「だろうね。あちらのご家族にしっかりお礼を言うんだよ。お母さんが、出向いてお礼に行きたいんだけど、このありさまだから。ピースを預かっている間は、しっかり面倒を見て、エサも食事の時間と量を守って、ちゃんと、食べさせるんだよ。血統書付きの猫は、飼うのが難しいんだよ。万が一、病気にでもさせたら、大変だよ。十分気を付けて、無事に返すんだよ」

返すという言葉を聞いて、寂しそうな表情を作ったヒフミンは、小さくうなずいて、返事した。「分かったよ。ピースが、帰りたいといえば、返すことになっているし。その時は、潔（いさぎよ）く、返すけん、寂しいけど。それまでは、一生懸命、面倒見る。きっと、お母ちゃんも、ピースの優しい顔を見てると、元気になるけん。ピースは、幸運の招き猫猫やけん。そうだ、おじいちゃんにも、紹介しなくっちゃ」

母親の了解を得たヒフミンは、ピースを抱きかかえると、おじいちゃんを探しに庭に出た。玄関前の小さな池を配した内庭には、おじいちゃんの姿はなかった。冠木門（かぶきもん）をくぐって、外庭に出ると、右手に見える小さな畑の片隅に鎮座している大きな岩に腰かけて、おじいちゃんはのんびりと桜を眺めていた。おじいちゃんの畑には、ナス、キュウリ、トマト、ピーマン、サツマイモ、大根、玉ネギ、ゴーヤ、インゲン、モロッコ豆などが植えてあった。

ピースを抱えたヒフミンは、笑顔でおじいちゃんに駆け寄って行った。「おじいちゃん、ほら、かわいいだろ～。ピースっていうんだ。アキちゃんちから、もらったんだ」おじいちゃんは、一目見て、高級な猫であることに気づいた。じっとピースの顔を覗き込み、ヒフミンに返事した。「これは、大した猫だ。血統書付きだな。高かっただろうな。毛並みはいいし、顔つきに、気品がある。一般庶民が飼っているそこいらの猫とは違う。いつまで預かるんだ？なるべく早く返した方がいい」

早く返した方がいいと言われ、カチンときた。ヒフミンは、口をとがらせ、事情を説明した。「おじいちゃん、分かってるよ。でも、アキちゃんが、しばらくホームステイさせて、ピースの様子を見ていいって。ボク、しっかり面倒見るし、エサもちゃんとやる。やけん、よかろ。おじいちゃんにも、お母ちゃんにも、迷惑かけん。責任もって、面倒見る。絶対、約束する。飼っても、よかろ？おじいちゃん」

ウ～～、とうなったおじいちゃんは、腕組みをして、ことの重大さを説明することにした。「ヒフミン、この猫は、そこいらにいる猫じゃない。間違いなく、血統書付きの高価な猫だ。買うとすれば、100万円ぐらいする。こんな猫が病気にでもなったら、動物病院に連れて行かんといかん。一回診てもらうだけでも、1万ぐらいするぞ。そんな治療代、おじいちゃん、だせんバイ」ヒフミンは、猫を飼うことを安易に考えていた。エサをやって、かわいがればいいぐらいにしか考えていなかった。猫を飼うのにお金がかかることなど、まったく考えたこともなかった。

「本当？ピースって、100円万もするとね」“100万、100万、100万、”ズキン、ズキン、ズキンと頭痛のように頭を叩き始めた。次第に、手が震えだし、腰が抜けて、畑にバタンと倒れ込んだ。地震が起きたかとびっくりしたピースは、ヒフミンの懐から飛び出し、一目散に畑から逃げ出していった。天を仰いだヒフミンは、亜紀が恨めしくなった。どうして、ピースが血統書付きで、高価な猫だってことをもっと早くに言わなかったのか、と心で叫んだ。すぐ返すのは悔しかったが、明日には、ピースを返すことにした。

薬が効きすぎたと思ったおじいちゃんは、岩からヒョイと飛び降りて、倒れ込んだヒフミンに手を貸した。「おい、そんなに、がっかりするな。ヒフミンも、血統書付きの猫が飼えるぐらいの男になればいい。しっかりせんか。男なら、金持ちになってみろ」あまりのショックで、ヒフミンは立ち上がってもふらついていた。金持ちと聞いて、一瞬、イラッと来た。お姉ちゃんは、家族のために出稼ぎに行っているというのに、どうして、子供に金持ちになれなんて言うや、と心の中で愚痴（ぐち）をこぼした。

金持ちという言葉を聞くたびに、秀樹が思い出され、さらに、ムカついた。「おじいちゃん、貧乏人は、金持ちには、なれんちゃなかとね。アキちゃんの友達に、ヒデキっちゅう生意気な金持ちがおるけど、ヒデキの親は、金持ちバイ。親が金持ちやから、子供も金持ちになるっちゃなかとね。金持ちになんか、貧乏人の子は、なれんバイ。そんなこと言うんなら、どうやったら、金持ちになれるとね？教えんね」

おじいちゃんは、ますます薬が効き始めたと心でほくそ笑んだ。マジな顔つきになったおじいちゃんは、よっこらしょと大きな岩にお尻を置くと、腕組みをして話し始めた。「貧乏人でも、金持ちになる方法はある。それは、プロになるこったい」ヒフミンは、プロと聞いて、将棋のプロのことを言っていることは、ピンときた。でも、プロになるにもお金がかかることを知っていた。しかも、今は、母親が病気で、治療費で大変なことも知っていた。

おじいちゃんは、何にもわかっていないと憤慨した。ヒフミンは、怒りをぶつけるように、返事した。「おじいちゃん、プロになるっていうけど、お金はどうするとね。奨励会に行くにも、金が、いるっちゃなかとね。ボクんちは、貧乏やなかね」おじいちゃんは、貧乏と聞くたびに涙が出そうだった。おじいちゃんの家系は、代々、貧乏だった。おじいちゃんも、貧乏人の子は、遺伝のように、貧乏人になると思っていた。でも、おじいちゃんは、ずっと、ヒフミンは奇跡を起こすと信じていた。生まれたばかりのヒフミンの輝く瞳を見たとき、この子は、きっと奇跡を起こす、とおじいちゃんは直感していた。

おじいちゃんは、寂しそうな表情で答えた。「そうたい、貧乏人は、いつまでたっても、貧乏人たい。でも、ヒフミンは、違うバイ。おじいちゃんは、信じとる。きっと、ヒフミンは、プロになれる。そして、きっと、名人になる。プロになれば、金持ちになれる。その時は、血統書付きの猫を飼えるたい。お金のことは、心配いらん。お姉ちゃんも、働きに出た。男やろ、死ぬ気でやってみろ」おじいちゃんは、七分咲きの桜を見つめ、ヒフミンの反応をじっと待つことにした。

ヒフミンは、プロになれば、金持ちになれることを初めて知った。もし、金持ちになれば、ピースに、おいしいキャットフードを食べさせ、病院にも連れて行けると思った。ヒフミンは、おじいちゃんを睨み付けて尋ねた。「本当ね？プロになったら、金持ちになれるっちゃね。嘘じゃなかね」おじいちゃんは、笑顔で大きくうなずいた。「嘘じゃなか。名人になったら、億万長者になれる。大金持ちたい」

その夜、ヒフミンは、ピースに別れを告げる決意をした。寝床についたヒフミンは、ピースを枕元に呼び込んだ。なんとなく、別れを予感したピースは、そっと、ヒフミンに寄り添った。ピースを抱き寄せ頭をナデナデし、そっと、耳元で囁くように別れ話を始めた。「ボクんちは、貧乏たい。ピースのような、血統書付きのネコを飼う金はなか。ピースには、おいしいごはんもやりたいし、病院にも連れていきたか。でも、そんな金は、今は、なか。悲しいけど、別れないかん。でもな、ボクは、必ず、金持ちになる。その時は、ピースを迎えに行く。それまで、我慢たい」

と金

翌日の月曜日、8時半ごろキッチンで朝食を終えた亜紀は、二階の部屋に戻り、ガンダムのショルダーバッグに財布、ハンカチ、スマホ、メモ帳、ボールペンを丁寧に入れ、それを肩に掛け階下に降りた。そして、スパイダーのブルーの首輪にリールを取り付けると、リビングでテレビを見ていた拓実（たくみ）に、ちょっと遊びに行ってくるからねと声をかけ、キッチンで洗い物をしていたアンナに「ピースに会いに行く」と大声で叫んだ。

９時少し前に、亜紀は、拓実に笑顔で小さく手を振って、スパイダーに引かれるように玄関に向かった。玄関のドアが閉まる音がした時、「ア」っと声を発したアンナは、水道の蛇口も締めずに、大あわてでドタドタと玄関にかけて行った。玄関のドアを勢いよく開けたアンナは、大きな声で亜紀に叫んだ。「車に注意して、右端を歩くのよ。ちゃんと、右左見るのよ。分かった、アキ」

亜紀は、大きな声で、ハ～～イ、と返事すると、平原歴史公園の南側を東西に走る細い道を東に向かって歩いた。そして、曽根地区の中央を南北に走る幹線道の交差点に到着すると、アンナの言ったことを思い出し、左右を確認して幹線道に出た。亜紀とスパイダーは、車と自転車に注意しながら右端を南に向かってゆっくり歩き始めた。曽根地区は、台地状の住宅街のため、幹線道は南に向かって上りになっている。また、中央線がないほど道幅が狭く、車が多いときは、子供にとっては危険であった。路線バスも、大型バスではなくマイクロバスが走っていた。

亜紀は、行きは上り坂になっているので、徒歩では少し大変だったが、一日おきにでも遊びに行けば、一週間ぐらいだったら、ピースはどうにか我慢してくれると期待していた。スパイダーもヒフミンの家は近所だから、いつでも遊びに行けると思い、それほど寂しくなかった。ピースと毎日顔を合わせて会話していた亜紀は、一晩会話しなかっただけで、一週間ぐらいピースと会わなかったような気持ちになっていた。

「ピース、ヒフミンとうまくやっているかな～。昨夜は、ちゃんと、ご飯食べて、ぐっすり眠れたかな～、家族のみんなから、かわいがられているかな～」ピースのことが昨夜から気になっていた亜紀は、独り言を言うようにスパイダーに問いかけていた。少し足が重たくなってきた亜紀は、あともう少し、と自分を元気づけながら、スパイダーに引っ張られるように坂道を歩いていた。スパイダーは、自分の縄張りを確認しているかのように鼻をクンクン鳴らしながら、散歩を楽しんでいるようだった。

朝、7時のアラームで飛び起きたヒフミンは、廊下を忍び足で歩き、ピースの部屋の前にやってくるとそっとドアを少し開いた。そして、チラッと中をのぞいた。ピースは、まだ眠っている様子だったが、エサの準備をすることにした。ドアを半分ぐらい開いて中に足を踏み入れると、危険を察したように、ピースがヒョイと身を起こした。「さすが、ピース。人の気配を感じて、目を覚ますとは。オハヨ～～、ピース」小さな声で挨拶したヒフミンは、キャットフードと水をセットして、「いつでもどうぞ」といって部屋を出た。

8時過ぎに、ヒフミンは母親の寝室に行き、母親の手を引きながらキッチンにやってきた。朝食は、いつもは香子が作っていたが、香子が出立してからは、おじいちゃんが作ることになっていた。家族そろってキッチンで朝食を済ませると、ヒフミンは両手を合わせ「ごちそうさま」と言った。そして、おじいちゃんと母親に、ピースを返す決意を伝えることにした。突然、口火を切った。「ピースのことなんやけど。やっぱ、返すことにした。ピースが、帰りたいような顔をしとるけん」

母親は、突然の気持ちの変化に驚いた。母親は、自分のせいで、ピースを返すことになったのではないかと心配になった。「あら、あれほど喜んでいたのに。ピースの具合でも悪いのかい？」ヒフミンは、笑顔で答えた。「違うよ。ピースは、アキちゃんちが恋しんだよ。ボクと暮らすより、アキちゃんちで暮らす方が、ピースには、幸せだって、分かったんだ。それだけ」母親は、怪訝（けげん）な顔つきでうなずいたが、おじいちゃんは、笑顔で声をかけた。

「そうか。それがいい。いつ、返すんか？」ヒフミンは、即座に答えた。「今日、返す。すぐに、アキちゃんに電話する」母親は、顔を引きつらせて、声をかけた。「そんなに、急がなくても、いいんじゃないか。もう一日ぐらい預かっても、わるかないと思うがね」母親は、ヒフミンの気持ちの変化が、今一つつかめなかった。「やっぱ、今日返す。ピースは、一刻も早く、帰りたいみたいだし。もう、決めたことだし」

おじいちゃんは、ヒフミンの気持ちの変化を確かめたくなった。おじいちゃんは、ヒフミンに誘導尋問（ゆうどうじんもん）を始めた。「大好きなピースと別れるということは、心機一転、心を入れ替えて、猛勉強して、大学に行く決意をしたってことか？たいしたもんたい。ヒフミン、頑張れ」ヒフミンは、とんでもない誤解をされたと顔を真っ赤にした。プロになって金持ちになる夢は、極秘にしておこうと思っていたが、とっさに、誤解を解こうと口を滑らせてしまった。

「違うよ。そんなんじゃない。ただ、金持ちになるまで、我慢しようと思って」母親は、まったくヒフミンが言っている意味が分からなかった。ヒフミンは、中学を卒業したら、香子と同のように軍事工場で働くと断言していた。そんなヒフミンが、金持ちになるということは、やっぱアホだと思った。「ヒフミン、そんな、無理をしなくていいんだよ。貧乏でも、猫ぐらいは、飼えるさ。どんなに、軍事工場で働いても、金持ちになんか、なれないんだよ」

ヒフミンは、うつむいて、しばらく黙っていた。顔を持ち上げたヒフミンは、決意を口にすることにした。「必ず、金持ちになる。そして、ピースを迎えに行く。必ず、プロになって、名人になってみせる」この時のヒフミンの顔には、大人の表情が現れていた。母親には、突然の気持ちの変化が分からなかったが、ヒフミン自ら、プロへの決意を言ったことに手が震えた。「本当かい？」と疑うように問いかけたが、突然、母親の目からドッと涙があふれ、これ以上、言葉が出なかった。

プロへの決意を母親に伝え、気持ちが晴れ晴れとしたヒフミンは、ピースと一緒に桜を見ようと、早速、ピースの部屋に向かった。ピースもすでに食事を終えて、ヒフミンがやってくるのを待っていた。ヒフミンは、ピースをびっくりさせないように静かにドアを開け、忍び足で部屋に入った。「もう、お別れだ」とつぶやき、亜紀に言われたようにピースを優しく抱きかかえた。

ヒフミンは、冠木門を出ると左右にツツジが植えられた外庭の中央道をゆっくり歩き、外庭前の東西に走る細い通りに出て、左に曲がった。そこには、大きな桜の木があり、びっしりと桜を咲かせていた。ヒフミンは、桜の木の下にやってくると、よく見えるようにピースを両手で持ち上げ、ヒフミンもピンク色の桜を見上げた。ちょっと、寂し気にヒフミンはつぶやいた。「ピース、きれいだろ。桜って、いいな～。アキちゃんちに帰っても、時々、遊びに来てくれよな。ボク、頑張るから」

ふと、女子の声がしたような気がして、西側の曽根幹線道路に振り向いた。オリーブ畑をはさんで50メートルほど離れた幹線道路から亜紀が歩きながら両手を振っていた。ヒフミンが右手を振ると「ピース、ピース」と亜紀のかわいい声が澄み切った空気に響き渡った。スパイダーは、肉眼では確認できないほど遠くに見えるちっちゃなピースの姿に気づいたのか、突然、ピースめがけて駆けだした。亜紀もスパイダーに引っ張られながらヒフミンのもとにかけて行った。

亜紀が息を切らせてヒフミンのもとにたどり着くと、ヒフミンは笑顔で挨拶した。「オハヨ～、今、ピースと花見をしてたんだ。グッドタイミングだね。みんなで、花見をしよう」亜紀は、大きな桜の木にびっしり咲き誇った桜の花に目をやり、青空に向かって叫んだ。「サクラは、ステキ」あちらこちらの桜の木に目をキョロキョロとやりながら、話を続けた。「ヒフミンちには、桜の木がたくさんあって、いいね」

ヒフミンは、照れくさそうに答えた。「ぼくんちのは、あの１本だけなんだ。この桜も、あっちの桜も、よそんちのなんだ。でも、曽根には、桜がたくさんあって、いいよな。ピースも、サクラ、好きみたいだよ。ほら」ヒフミンは、腕の中で気持ちよさそうな表情を作っているピースを見つめ、亜紀にものぞかせようと亜紀の目の前にピースを持って行った。亜紀は、ピースの幸せそうな表情を見て少し安心した。

亜紀は、ピースの頭をナデナデするとヒフミンに声をかけた。「ピース、ここが気にいったみたいね。よかったわね、ヒフミン」ヒフミンは、大きな桜の木を見上げ、独り言のように言った。「うん、でも、ピースは、帰りたいみたい。ピースは、やっぱ、アキちゃんと一緒がいいよ。一晩、一緒に過ごせて、うれしかった。だから、アキちゃんちに、今日、返すよ」ヒフミンの気持ちは、スッキリしていた。亜紀は、たったの一日で返すことに、びっくりしてしまった。「え、もう返すの？ピース、嫌がったの？キャットフード、食べなかったの？」

ヒフミンは、青空を見つめて、自分の将来について語ることにした。「いや、ピースは、とっても、機嫌がよかった。でも、今のボクとは、釣り合わない。こんな血統書付きで、高価なネコは、今のボクには、飼えない。きっと、金持ちになって、ピースを迎えに行く。それまで、我慢する。ピースは、長生きするよな」ヒフミンが言ってることがピンと来なかったが、きっと、おじいちゃんに飼うことを反対されたと思った。

亜紀は、納得したかのように返事した。「ピースは、今、何歳か、わかんないけど、きっと、長生きすると思う。ヒフミンが金持ちになるまで、アキが責任もって飼うから、安心して」亜紀は、ヒフミンが金持ちになるとは心では思っていなかった。意地悪を言うようで気が引けたが、どうやって金持ちになるのか聞いてみた。「ね～、ヒフミン、金持ちになるって、社長にでもなるの？」

ヒフミンは、はっきりと将棋のプロになると言いたかったが、今の段階では恥ずかしくて言えなかった。「とにかく、金持ちになると決めたんだ。きっと、なってみせる。ボクは、ヒデキのような金持ちのボンボンじゃないけど、ボクだって、金持ちになってみせる。“歩”だって、“と金“になれるじゃないか。絶対、”と金“になってみせる。アキちゃん、約束する。必ず、”と金“になって、ピースを迎えに行く」

亜紀は、“と金”、と聞いてヒフミンのプロへの決意を確信した。その時、大きな目標に向かって走り出すヒフミンの勇気が感じ取られた。小さくうなずいた亜紀は、大きな声でエールを送った。「ヒフミンなら、きっと名人になれる」